

方法など、もつとたくさんのことを学ばなければならぬと思いました。

家老の頼み

春の終わりのものうい一日が、暮れようとしていました。道路に面した格子戸の外を、物売りの間のびした声が通り過ぎ、遊びから帰る子どもたちの、にぎやかな笑い声が聞こえてきました。

えんがわで、つくろい物をしていた妻のれんは、その声に驚いて顔をあげると、夕日が西に傾きかけていました。

「夫はどうしたのだろう。」

ふと不安な気持ちにおそわれました。家老の西郷頼母によばれて、夫の豊助が家を出たのは昼前でした。